

1 力、権力、暴力

これから、児童文学と暴力というテーマを考えることにしたい。これは、新機軸ではない。これまでいくつも重要な考察がなされている。たとえば、本田和子「無垢」と「暴力」^①や、あさのあつこ「魅力的暴力考」^②などである。もちろん、これらの他に、いじめや児童虐待などの社会問題を論じた本が多数出版されている。そこには、子どもが暴力に曝される様子が述べられている。しかし、ここでは、児童と暴力ではなく、文学と暴力の側から考えたいと思う。

暴力は、力の行使の一形態である。殴る、蹴るは、肉体の力を振るうことである。しかし、非暴力も、非力ではない。非暴力直接行動も力の行使に他ならない。力と無縁ということはないのだ。英語では、force, power, violence

という違う単語も、日本語では、力、権力、暴力といった力の一字を含むことで意味のつながりをもった一連の用語になる。したがって、非力と暴力を両極とする力の広がりとしてイメージした方が現実的だろう。「受肉した存在であるわたしたちにとって、暴力は宿命である」^③という主張があるように、この世は、すべてなんらかの力と力が拮抗しつつ分布する力の気圧配置、その絵図ではないのか？ 文学も、力と力の闘ぎ合いである。それは、物語の力と呼ばれたりもする。児童文学も、文学である限りにおいて、この闘ぎ合いと無縁ではないはずだ。

2 『西の魔女が死んだ』

わたしがこのテーマに思い至ったのは、映画版『西の魔女が死んだ』^④のDVDを見てのことだ。くり返し五、六回見ていると思うのだけれど、いつもひっかかる場面が